魔女の子ども

wolf☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女の子ども

【Ｎコード】
Ｎ８９１５Ｆ

【作者名】
ｗｏｌｆ☆

【あらすじ】
魔王を倒すため村を出ようとした少年の前に１４年前父親を殺した憎き仇が！なんとか追い払えたものの，その場で倒れた主人公が目を覚ました時，少年の体は女の子に！！【まだ全快ではないですが、少し良くなりました。】

プロローグ1（前書き）

小説を書くのは初めてです。至らないところもあるでしょうが、そこはまぁ大目に見てやって下さい。

プロローグ1

少年は強くなりたかった。
誰にも負けないぐらい強くなりたかった。
そしていつかできれば、復讐してやりたかった。
僕の気持ちを、苦しみをわからせてやりたかった・・・

僕は高く頑丈な外壁に守られた村に住んでいた。大陸の南東に位置する辺境「イリス」。
大きな村ではないが、海に面しているため魚がよく獲れ、それなりの生活は確保できていた。
外に出れば魔物がウヨウヨいるため村は閉鎖的だったが、村から離れた海水に浸食されていない土地に田畑を作り、魔物に荒らされないよう戦士たちが見張りをした。
そして出稼ぎの戦士たちが持ち帰る物資を村のみんなで分け、人々の生活は潤った。

戦士たちは帰ってくると村の外の話を聞かせてくれた。魔物にやられた村の話を聞くたびにガーランドは悲しくなった。
どうして魔物は悪いことをするんだろう？何故人を殺すの？
そういえば母さんが言ってたっけ……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「魔物たちは悪くない。悪いのは魔物を操っている［魔王］よ……」
「魔王がいなくなったらいいの？」
「……そうよ。魔王がいなくなったら………」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

……魔王がいなくなれば……もう悲劇は生まれない！

……時は来た。

「どーしんたんだ？最近ロクな返事しねーな」

「ん……なんでもない」

やっぱ生返事になってたか。考え事するとまわりに注意が向かないのはいつまでも直らない。

「いつも言ってんだろ？なにかあったら俺を頼れってよ☆」

「うん……」

ブライはいつだって優しい。幼くして親を亡くした僕は、その優しさにどれだけ救われたことか。

彼を悲しませることはしたくなかったが、僕はもう心に決めていた。

この村では男児はみな５歳になると剣術を習わされる。

自分の身は自分で守れってことだ。

ブライはとても成長が早かった。剣の腕も、体も。

まだ１６歳なのに村の五本指に数えられるほどだ。

村一番の剣士と呼ばれるようになるのも時間の問題だろう。

僕はというと・・・サボってばかりだった。

実は日中こっそり村の外に出て魔法の練習をしていたんだ。

僕の母さんは魔女だった。

父さんと母さんはある遠い町で知り合った。

そして偶然その町が魔物に襲われたから、二人は一緒に戦った。

それからは二人はいつも一緒に行動するようになり、気づけば母さんは妊娠していたんだそうだ。
子どもを連れて旅をすることはできない。そう判断して、二人はイリスに帰ったんだ。
その後　僕が生まれた。

イリスにも度々魔物が襲ってきたけど、父さんは強かったから危ないことなんか一度もなかった。
母さんも戦わずにすんだ。
魔女はこの世界では「魔王の子ども」だと言われている。
もし魔女だってばれたら、母さんは村にはいられなくなる。
父さんは、母さんの正体がばれないように命がけで戦ってきた。
でもある日、いつの間にか村の中に侵入した魔物が父さんを殺した。
戦士たちはだれも太刀打ちできなかった。
母さんは僕を守るため、仕方なく魔法を使った。
魔物は魔法を嫌がり、すぐに逃げていった。
母さんのおかげで村は救われた……はずなのに……
村のみんなは母さんの正体が魔女だということを知り、母さんを恐れた。
そして、「殺せ」という声が上がった。
母さんは、自分が救った村人たちに殺されたんだ。
母さんは抵抗しなかった……

「そういうと思っておった」
僕は長老に挨拶に行った。もしかしたらもう帰らないかも知れないけど。
「条件がある。ブライを倒せたら村を出るのを許そう」

プロローグ1（後書き）

取り敢えずプロローグなので、ちゃっちゃと行きましょう。
まだプロローグ終わらないですけどね。。

プロローグ2（前書き）

プロローグ長くてごめんなさい。

プロローグ2

「俺が、ガーランドと……！？」
「そうじゃ。アレを村の外に出してはならん。お前なら負ける心配はなかろう」
「しかし……」
「お前は心配ではないのか？」
……確かにガーランドを一人行かせるわけにはいかん。
だが、断ることも……
潮時か……
「わかりました」

長老とともにブライが広場にやってきた。
長老…ブライに僕を殺させるつもりか。
まぁ、魔女の息子だしね。
でもそうはいかない。
ブライは僕が唯一信じられる人間。親友なんだ。
ブライがそんなことを了承するはずがない。
それに、ブライでは僕には勝てない。

「始め！」
ブライはゆっくりと歩を進める。
剣を構えないまま、ただ僕に向かって歩み寄る。
そして間合いに入った刹那、ブライは無造作に剣を振った。
ブライは強かった。さすが村の五本指。
でもこの程度じゃ僕には勝てない。それともわざとだろうか？
僕はブライの剣をかいくぐり、足を払った。
倒れたブライの剣を踏み、首に剣を突きつける。
「勝負…ありですね」

長老にむかって言い放つ。長老は明らかに困惑していた。
まさかブライが負けるとは露ほども思っていなかったのだろう。

僕の背中には大きな引っかき傷がある。
恐らく魔力が込められていたのだろう。全く治る気配をみせない。

僕はあの時、ブライに背を向けてしまった。
叫び声が聞こえた。
正面の建物の角から顔を覗かせたのは、幼馴染のティアだった。
ティアの視線は僕の背後。
振り向こうとして僕は斬られた。いや、引っ掻かれた。

そこに、僕の親友のブライはいなかった。いつも笑顔で話しかける、優しいブライはいなかった。
代わりに14年前に父さんを殺した、あの魔物が立っていたんだ。

「お前は……！！あの時の！！！」
当時まだ2歳だった僕は未だにやつの顔を覚えていた。
こいつに父さんが殺されたことを聞かされたのは、僕がこいつの顔を見たその3日後。
それでも忘れなかったのは、その後母さんの死を目の前で見たからだろう。

「ガーランドよ、我とともに来い。お前は魔女の息子。魔王となるべくして生まれたのだ」
「……魔王……？」
魔王だと……？ふざけるな！僕がそんなものに……
「その目で見ただろう、人間の醜さを。お前の母を殺したのは、ひ

弱な人間共よ」
「……確かに、僕は人間たちが憎い。だけど……父さんを殺したのはお前だ！だからだから母さんも殺されたんだ！！！」
走り出しながら僕は魔法を詠唱した。剣と長い爪が交錯する。僕はすれ違いざまに冷気を放った。
魔物も、魔法ではない「魔術」を放つ。二つの力がぶつかり合って弾けた。その欠片が偶然ガーランドを襲い、とっさの判断が出来ずに直に受けてしまった。
だが見た目には何も変わったところは無く、ガーランドはただ呆然と魔物と向き合っていた。
魔物も、何も起きないガーランドの体を不思議な表情で眺めていた。
「何を呆けておる！さっさとせんか！！」
……長老・イズ・ＫＹ。
ってゆうか、今の言葉は誰に向けて言ったんだ？（魔物じゃね？）
長老の声でわれを得た魔物は姿を消してしまった。
……また逃がしてしまったか……次は無いと思えよ！
しかしさっき受けた……魔術？いったい何の……
あっ、なんだかすごく眠い。ヤバッ、倒れそう……

プロローグ2（後書き）

次回から更新が遅くなると思います。
あ～忙しい忙しい；

1話：お目覚めですか？（前書き）

キャラの性格上、進行が難しいところもありますが。そこは作者の力ですw

1話：お目覚めですか？

「グゥアッ！！」
断末魔の叫びを上げて倒れた。鋭い長い爪で背面から肺を肋骨ごと抉り、横に薙いだ。
致命傷だ。
血を大量に吐き、爪の毒で全身が麻痺し始め、男はもう自分が助からないことを悟った。
そして愛する妻と息子を守ることが出来なかった事を……
男は自分を殺した相手の正体をその眼で見ることなく絶命した。

これで邪魔はいなくなった。後は簡単に事は進む。
「魔女」と「魔王」が同時に手に入るのだ……

ガバッ！
汗を掻いてる。……また、あの夢か……
ベッドから降りようと体を横に向けた瞬間、ガーランドは背中に大怪我を負っていることに気づいた。
「痛ーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」
ドサッとベッドに沈む。更なる激痛。
何でこんな怪我を！！？いつ！？僕は何を……
アレ？えーと……ここ、うちじゃないね。
それに……なんだろ？寝る前のこと全然思い出せない……
そのとき扉が勢いよく開いた。
「大丈夫！？ガーちゃん！！！」
……ティア、「ガーちゃん」はやめてったら……（涙

「だんだん思い出してきた……」
まさかブライが魔物だったなんて……
あの優しいブライが……！
余程怖い顔をしていたのだろう。涙目になっているティアをに気づいて僕は落ち着きを取り戻した。
「あのね、ガーちゃん。その……服のことなんだけど……／／／」
「服？」
あぁ、取り替えてくれたのか。そういえばアイツに切り裂かれたんだっけ。
……ん？なんで顔紅くなってんの？
何かおかしなところでも・・・・・
……
……
……
……
うん。
つまり、
その……あれだ。
どうつっこめばいいのかわからない。
こんなときは……そう！思う存分壊れてしまえばいいのさ！！！
教えて神様！！！僕にいったい何をしたの！！！！？
この胸の小山と股間の寂しさはいったいなにーーー！！！！！！！？？

「ガーちゃんが倒れた次の朝にはもう女の子になってたよ」
嘘でしょ……ってだからなんで顔紅くなってるの？
立ち上がって鏡を覗いてみる。鏡の向こうには僕にそっくりな女の子が立っていた。
胸は体格に反して大きく、腰はくびれてさらに細くなり、お尻も、ボンッ！って感じになってる。
……現実だ……受け止めるしかないのだろう。
まぁ、性別なんて僕にはあまり関係ないし。
僕は元々非力で、小柄で軽いから実際には殆ど変わりは無いと言える。
顔はちょっとだけ変わった。たぶん表情だろう。
今までは、「どちらかというと男」って感じの顔だった。
でも今は完全に女の子にしか見えない。
同じ顔でもだいぶ印象が変わってしまっている。
……目は少しパッチリしたかな？
「ねぇ、ガーちゃん……」
「ん、なに？」
「……女の子になったガーちゃん……凄く可愛い／／／／／」
！！！！！！！！！！！！
ティア……それってなんだかマズイ展開じゃない？

1話：お目覚めですか？（後書き）

ガーちゃんは真面目なので動かしづらいんですよね・・・
その分ティアには活躍してもらおうと思ってます。（と思ったけど、ティアは進行上障害となってしまうのでサヨナラしましょう）
「魔女の子ども」は作者的には真面目なストーリー性を持っているのですが、やはり笑いも必要でしょうかね？
難しいですね～。。

2話：魔女め（前書き）

意味わからないとか思わないでくださいね。

2話：魔女め

考えてみると……僕って今までみんなの目にどう映ってたんだろう？
女の子になってもあまり変わってないって事は、
男だったときも女の子に見えたりしたってこと！？

……まさかね……
それにしてもなんで女の子になっちゃったんだろ？
考えられるのは、アイツの魔術か……
どうしてこんなことを……
女になったらなにか変わるのかな？女のほうが都合がいいとか？
も～、わかんないよ～。

「ねぇガーちゃん、困ったことがあったらいつでも言ってね」
「……？どういう意味？」
「だって、ガーちゃん女の子になったばっかりだから……　わからないこととかいっぱいあるだろうし……／／／／」
（；－△－）……また意味わかんないよ。
随分積極的になったもんだね。
自分から他人に話しかけるのも大変だったのに……
「あ…うん、ありがと♪」
一応笑顔でお礼。
「／／／／／／／／／／」
ボンッ！！！！
わ！大変だ！！ティアの顔が爆発した！！？
……うぁ～、顔がトマトより真っ赤だよティア……。
そしてなんだかどす黒い煙が……

とりあえずティアをベッドに寝かせ、僕は外に出た。
広場はもう何事もなかったかのようにがらんとしていた。
ティアの話では僕は４日も寝ていたらしい。人間そんなに眠れるもんなのか？
体がギクシャクしてるのはそのせいか、或いは性別が変わったからか……。
男と女とでは体のつくりが細胞レベルで違うもんね。

ブライの家は無くなっていた。
村人が壊したのかな？まぁ魔物だったんだから当然か。
村人たちが魔物とグルじゃなくてよかったと思った。
けど、時々すれ違う男の人が顔を紅く染めてこちらをずっと見ているのだけは、正直ウザいと思った。
っていうか、ぶっちゃけこういう粘っこい視線には覚えがある。
やはり女の子として見られたりしてたんだね、僕……。
嘆かわしい限りだよ（Ｔ＿Ｔ）

「長老」
僕は再び長老の元へ足を運んだ。
ハプニングはあったが、僕はブライに勝ったのだから、約束通り村を出る。
「出ても、いいんでしょう？」
「……魔女め、さっさと村から出るがいい。二度とイリスの地を踏むな」
……これはキた。
「母さんを殺したお前なんかより、魔物のほうがまだマシだ！！！！」
顔も声も、可愛い女の子になった今では全く迫力がないが、それでも精一杯睨み倒して外に出た。

あぁ、背中が痛い……。
っていうか、この小説「……」が多くない？
ティアもう起きてるかな？ちょっと寄ってみよ。
てか剣置いてきたままだ。
律儀にノックして返事を待つ。ティアの声が聞こえた。
ティアは一人暮らしなんだ。その辺説明してなかったね。

僕が魔女の子どもだってみんなに知れてから僕を避けなかったのは、ブライとティアだけだった。
特に男に対して最上級の人見知りをするため、誰とも仲良くなれなかったティア。
壁の外で一人魔法の練習をする僕に、自分から話しかけてきたのだ。
同じ孤児同士だからだろう。
なんだか懐かしいな……。

ドアを開けるとベッドの上にまだ顔を染めたままのティアが座っていた。
まだ燻っているみたいに、薄い煙が立ち上っている。
「ガーちゃんどこ行ってたの？」
「長老のとこ。最後の挨拶をしにね」
「村を出るの！？」
「うん。ずっと前から決めてたんだ。母さんが言ってた。魔王がいなくなれば、魔物は人を襲わなくなるんだって」

2話：魔女め（後書き）

魔王・・・・いい響きですね。
作者はＦＦ好きなので、影響受けまくりです。
でも敵側の方が好き。

3話：黒い煙の正体（前書き）

ティアぁはっきり言って暴走キャラです。
その暴れっぷりは、作者の予想をも超えた行動をとるほど（汗）

3話：黒い煙の正体

――――――……そう、母さんが言ったんだ。
だから、僕は魔王を倒す。
魔王を倒せば……――――――

「あたしも行っちゃだめ？」
「危ないからだめ」
暴れるティアを宥めながら、僕は大きなため息を三つくらいついた。
なんでこんなに懐かれてるんだろう？
ベッドの傍に置いてあった剣を取って僕は家に帰った。
ティアは終いにはないてたが、さすがに連れては行けない。

旅の準備をし、部屋の隅に飾られた大小を手に取る。
刀は長い間使われていない。
１４年前、父さんが殺されたあの日から。
ガーランドは刀を鞘から抜き、刀身を眺めた。
刃こぼれや曇りは一切見当たらない。
それどころか、まるで生きているかのように気を放っている。
鍛えられたばかりの新刀のように煌めき、初めて触れたものとは思えないほど手に馴染んだ。
……僕に力を貸してくれるんだね、裂神……
「ガーちゃん！！」
「ッッ！！！」
驚いて刀を取り落とす。切っ先が顎を掠めて床に突き刺さった。

ハッ……はぁ～びっくりした、
もう少しで裂神に殺されるとこだったよ……
「……もぅ、今度はなんなの？」
「ガーちゃん、服持ってないんじゃないかと思って……」
「……僕は毎日裸で過ごしてるどこかの原住民じゃないからね？」
「女の子用の服は？」
「……なんだと？」
「だってガーちゃんは今女の子なんだから、女の子の服着なきゃ。サイズも違うはずだし、着方がわからないのもあるでしょ？それと、喋り方ももっと女の子らしく可愛くしなきゃ♪」

・・・・orz
そんなばかな……。
確かに女の顔で、男の服に男の口調ではおかしいかも。
しかし……

ティアに引っ張られてやってきたのは、ティアの従姉クロムの家。
ティアは何やらクロムと真剣な顔で話し込み（二人とも顔真っ赤）、戻ってきた。
「クロムがいいって。行こ！」
クロムの部屋のベッドをどかし、その下にある階段を降りたその先にあったのが、僕を
・・・・orz
→こうさせた原因だ。

地下室いっぱいに可動式クローゼットが並び、下がっているのは全て・・・・ロリ服。
クロム……いったいどこからこんなものを……そして何故？？
「ねぇねぇ、これなんか似合うと思う！」

ティアが手に取ったのは、メイド服（超ミニ）＆猫耳。
・・・・・ｏｒｚ
ィャだよ……そんなの着るくらいなら僕は自害する。
元男という僕の立場をもうちょっと考えてください。
……猫耳さらに意味わかんないし。
「いや？なら、これ！」
・・・・・ｏｒｚ
ゴスロリかよ（超ミニ）……なんでそこまで絶対領域を強調するんだ？
てか猫耳……（Ｔ＿Ｔ）

ティアの顔が爆発したときにどす黒い煙が上がってたのは、これを企んでたからか……。
ティアやクロムに任せたら僕自身が壊れてしまいそうなので、自分で探すことにした。
無難に白のワイシャツと黒のフリフリしたミニスカート（パンツ系は一着も無い）。
どの服もサイズが恐ろしいほどぴったりだったのは偶然だということにしよう（クロムは大柄だった）。

クロムにお礼を言い、家に帰ってティアから服の着方を教わった。
ただ着るだけじゃダメだと怒られてしまった。どう違うんだろ？わかんないなぁ……。
もちろん下着も教わることに（顔が燃えるかと思った。ティアは鼻血で失血死しかけた）。
ティッシュを鼻に突っ込みながら強引に猫耳をつけさせようとするティアを必死でかわし、説得し、懇願し……。
ティアが素直に帰って行ったのが気になったけど、つっこみ疲れでもうくたくた。

僕はもう寝ることにするよ……。

3話：黒い煙の正体（後書き）

更新遅くなるとか言っておきながら、平日は何気に更新できることがわかりました。
作者としても、さっさと村を出て欲しいのですがねぇ・・・。
その辺はガーランド次第です。

4話：華の町

また、夢を見た。
今度は違う、初めてみる夢だった。
僕は宙に浮いていて、上から全体を眺めている。
僕にそっくりな女性が、人の形をした魔物たちに囲まれている。
どうやら敵同士ではないらしい。
一人の魔物が彼女の前に進み出た。
何か言ってる。
ザワザワして何を言ってるのか聞き取れない。
女性が何か呟くと目の前の魔物が消えた。
周りの魔物たちも消え、女性も消え、僕は目覚めた。

なんだ、まだ夜中か。
……いや、ある意味都合がいいかも。
ティアに見つかったらまずい。
今のうちに……。

僕は昨日クロムからもらった服に着替え、荷物と刀を持って家を出た。
外は閑散とし、冷たい風が渦を巻いて吹きすぎる。
人の影は見当たらない。
夜空を見上げると、真円に近い真っ白な月が光を投げかける。
外壁を越えた僕は、昔父さんがしてくれた話を思い出しながら歩き続けた。

……っていうか、ティアほんとについて来なかったね。
夜中だろうが意地でもついてくると思ってたのに。

僕は幼き日に父さんがしてくれた話をすべて覚えている。
父さんは村の外にも仲間や友達がいっぱいいたらしい。
別に助力を期待しているわけじゃない。
でも魔王について何か知っているなら、尋ねる意味もあるさ。

辺境の森を越え、辿り着いた崖からは［華の町翠蓮］が見下ろせる。
翠蓮の人々は不思議な力を持って生まれてくる。
どんな力かは人それぞれだが、家系によるものが多い。
稀に例外もいるらしいけど。
っていうか、外から来てここに住み着いた人もいるから、無能者も少なくはないはずだ。

確か翠蓮には撞源という人がいるはずだ。
もちろん父さんの仲間。
きっと力になってくれるはず。

翠蓮の町は結構大きかった。
入り口近辺は長屋が連なってるけど、そこを抜けると商屋が所狭しと立ち並ぶ。
……この格好じゃさすがに目立つよね。
商人たちが熱心に声をかけてくるけど、僕は『無視しますから。』というオーラをふんだんに放出しながら歩き続けた。
と、小さな女の子がよそ見しながら駆けてきて、正面からガーランドに勢いよくぶつかった。

……軽すぎて逆にひっくり返っちゃったけど（笑）
「大丈夫？怪我はない？」
女の子を立たせ、汚れを払いながらそう言った。ちょっと涙目だったけど、頷いたから大丈夫だろう。
可愛いなぁ。
「ねぇ、撞源っていう人のお家知ってる？」
「……うん」
頷くと、女の子はわき目も振らずに走り出した。
ついて来いってことかな？
僕も後ろからついて走り出す。
ヤバッ、見失いそう……

立ち止まった女の子にやっと追いついた。
目の前には何気に大きな家。
翠蓮の町には場違いな洋式の建物で、薄い緑色の外装は僕の目には優しい。
最近左目が霞むんだよね……

あれ、さっきの女の子がいない？
まだお礼も言ってないのになぁ。ま、いっか。
玄関の重そうな扉にあるライオンのやつ（ノック）を思いっきり鳴らした。
たぶん近所迷惑。でもそんなこと気にしないもんね。
父さんの仲間かぁ、どんな人だろ？

4話：華の町（後書き）

実は辺境の森でいろいろ大変な目にあったりもしてますが、ここでは省略しました。

・・・・面倒だったってのもあるんですけど（笑）

なにより、ガーランドは自分の苦労を他人に見せたくないやつなので。

ガーランドが話す気になったら書きます。たぶん無いでしょうけど。

5話：父さんの仲間

扉がゆっくりと開いた。
あっ、もうなんかアレだ。
空気っていうか、匂いが違う。
でも表現の仕方がわかんないからいいや。
僕はあまりこの匂い好きじゃないけど。

戸口に現れたのは、車椅子に乗ったガチムチ白髪の中年男性だった。
んー、これはどういうことでしょう？
「なにか御用かな？」
「あっあの、撞源さんという方は……」
「私だ」
え、この人が撞源？そうなの？
……車椅子ってことは、とっくに引退してるのか。
まぁいいやどうでも。話だけでもしとこうか。
僕は昔父さんが話してくれた『合言葉』を記憶の倉庫から引っ張り出す。
「ｒａｇｅ　ａｇａｉｎ……」
「……！！！！」
撞源の目が驚愕に見開かれた。
華奢な女の子になった僕の体を上から下まで、そしてまた上まで眺める。
見られてる間、僕はなんとなく背筋がゾクゾクしたような気がした。
セクハラの匂いがしたのは僕だけだろうか？
そんな勝手な被害妄想にはお構いなし。
撞源は「ついて来なさい」とだけ言い残して中に入っていった。

まぁつまり合言葉ってのは、父さんと親しい仲だということを手っ取り早く伝える手段ってこと。
父さんの名前はレイゲン。『ｒａｇｅ　ａｇａｉｎ』を略した言葉だと、仲間内では言われているらしい。

建物は二階建て。玄関ホールは蒼い絨毯が敷き詰められ、階段の手すりは見たことが無いなんだか神聖そうな獣の姿が彫られている。
それ以上の装飾は無く、意外に簡素な感じ？だ。
家の中はとても静かで、他に誰の気配も感じない。
こんな大きな家に一人で住んでるのかな？

書斎のような部屋に案内された。
僕は許しも得ずに入り口側のソファに座った。
「マナー」という言葉は僕とは無縁だ。
一人で生きてきたからね。
「さて……」
撞源は真っ白な（名前わからない）木で作られたテーブルを挟んで僕の正面に止まり、厳しい表情で僕を睨み据えた。
……なんでそんな目で見るのさ？
「レイゲンとはどんな？彼のコードを知っている者は限られている」
この姿を見て誰も男だとは判断しないだろう。
たとえ本人がそう言っても。ここは一応女で通すか。
「私の父です」
「彼に娘はいない」
……よし、落ち着け。
微妙な展開だけど、なんとか切り抜けないと命に関わりそうだ。
そう自分に言い聞かせながらも、掌には汗が滲んできている。
「えと、私は……」
「さぁ、言ってみろ！」

撞源は立ち上がり、どこから取り出したのか、槍を構えている。
穂先が首に刺さりそうなほど近い。
……えっ？これってまずくない？（滝汗）
落ち着きなよねぇちょっと短気すぎるしそんな聞いてないよ父さん！！！！！！
こんなときはどうすれば……てかあんた車椅子の意味は！！？
「お前の名はなんだ？」
名前……（汗）えーと（汗）、ここは本名（汗）で行くべきか？（汗）それと（汗）も女（汗）の（汗）名前……？（汗）
「……べ、ベルニカ……」
……これで……いいのか……？（汗）
テキトーに言ったけど。
父さん……なぜこんな人を仲間にしたのさ？（涙）

5話：父さんの仲間（後書き）

ガーランド「槍微妙に刺さってたよ・・・・」
作者「マジデ？でもあれは俺関係ない。撞源が勝手にやったんだ。俺はちゃんと「刺すなよ？」って言っといたからな」
ガーランド「！言い逃れを！！」
作者「うわあぁぁ本当だって！！！！」

はい、本当です。撞源のキャラ設定はまったく無しです。作者も予想ガイ！です。

6話：ミーナ

撞源の構える槍はすでにガーランドの首に触れていて、血が滲んでいる。

痛い！！！
なんで父さんの仲間に会いに来てこんな目に！？
神様僕なにか悪いことした！！！？
なんなの！！！？

名前を聞いて撞源が眉をひそませる。
「……レイゲンとは？」
【おい撞源、今微かに声が震えたぞ。でもガーランドは気づかなかったようだ。よかったな】
ガーランドの頭の中では悪魔と悪魔が闘っている。
何故か悪い策しか思いつかないほど追い込まれているのだ。
ほら、（汗）の数が尋常じゃないでしょ？
それに撞源に対して殺意まで抱き始めたし（↑だから天使が出てこない）。
「……養女……」
……（汗汗汗汗汗汗汗）ヤバいもう後戻りできないよこれどーすんのねえ父さん助けてコイツ殺していい！！？
「……あぁ、そういえば最後にレイゲンやアデリアと会ったときに赤子を連れてたっけな！あのときの子か！！」
……へ？
それってもしかして、ミーナのことかな？（汗汗）
今になって思い出した。
母さんが話してくれた、イリスに帰る前に拾った女の子。
僕が生まれる前に病気で死んだって言ってた。

仲間たちには教えてなかったのか……？
ミーナの名前を知らないのは好都合だ。
ミーナには悪いけど、しょうがないよね。ここは娘オーラをアピッとかないと。
「……父は私のこと、本当の娘のように、育ててくれました」
そう、僕はか弱い女の子、とこれからは思わなきゃいけないんだよね？
【でも腰に下げている刀のせいで、全部台無しだ】
「ふむ、あれは子どもが好きだったからな。しかしあの時のチビがこんなに大きくなるとは！時流は疾風の如く……（合ってるか？）……それで？両親と義弟はどうした？弟は確かガーランドとかいったな」
先ずは槍を下ろせよ。……はぁ、こうなったらとことん貫き通すしかない。
「両親は１４年前、殺されました。ガーランドも、そのときに魔物に浚われて……」
「……」
驚きが僅かに表情から漏れている。撞源はどうやら何も知らなかったようだ。
伝えに行く人がいないから当然か。
「……お前はアデリアのことは知っているのか？」
「え？あ、魔女だってことですか？」
だから槍下ろせってば。
今更だけど、アデリアってのは母さんのことだ。
魔女だけど結構おっちょこちょいなんだ。人間と何も変わらない。
「うむ。アデリアは紛れもなく魔王の娘。その魔力はすさまじいものだった。なれば、奴らがその息子を狙うのは必然だ。ガーランドは確かに魔王の器だった。生まれ落ちた瞬間、一瞬だがイリスは恐ろしいほどの魔力に包まれた。今でも身震いがするほどにな。私はその場にいたからわかる。しかし、あのレイゲンとアデリアが死ぬ

とは、いったい何があった？」

6話：ミーナ（後書き）

【】の中は作者のつっこみなので気にしなくてもいいですよ。

さて、すでに知っている人もいるかと思いますが「レイゲン」とは、かの有名なウィリアム・スタンリー・ミリガンの交代人格の一人、「レイゲン・ヴァダスコヴィニッチ」です。彼は「憎悪の管理者」と言われ、アドレナリンの操作によって途方も無い力を発揮し子どもたちを守ったといわれています。

魔物と闘うときのレイゲンの姿から、彼をモデルにさせてもらいました。

7話：最強じゃん

――――ー母さん！！母さん！！！！！！

［母さん］　と呼ばれた藍い髪の女性は振り返り、

悲しみを帯びた目で少年に笑顔を見せた。

サヨウナラ・・・・・ー――――

僕は父さんの死、母さんの死、（妄想フル稼働で考えた）ガーランドが浚われた時の様子を撞源に説明し、自分（ベルニカ）がこれまでどう生きてきたかを（妄想で）話して聞かせた。

レイゲンが殺され、ガーランドが浚われ、アデリアが死んで独りになってからは村人たちに「魔女の子ども」と呼ばれるようになるそこそこ悲劇のヒロインになるような設定にしておいた。っていうか事実だし。

ガーランドは母さんがブライを追い払った翌日に浚われたことにしといた。

問題は僕の持つ魔力。

撞源言うとおり、僕は魔女である母さんの血を受け継ぐため、圧倒的な魔力を持っている。

魔王の器ってのは初めて聞いたけど。

母さんが死んでからはひた隠しにしてきた。

『魔力＝魔王・魔女の子ども』という図式がすんなり成り立つのだ。

例外はない。

それはつまり、その子どもも将来魔王・魔女になる可能性を否定できないということ。

昔は母さんが僕の魔力を無理やり抑えこんでくれてくれていた。

母さんが死んでからは訓練して自分で魔力を抑えるコツを学んだ。

でも、たまに何かの拍子に魔力が漏れ出るころがある。それを知っていたからブライはイリスを離れずに僕を監視していた……。

今ではもうそんなへまはしないが、さっきは危なかったよ。殺気と一緒に魔力を放出するところだった（汗）

最近更に魔力が高まっているような気がするんだ。

抑えるのに苦労するほどにね。

体が女の子になったことと関係があるのかな？

とにかく、今更僕はガーランドだって言ってもコイツが信じるとは思えないし、むしろ真剣に殺されかねないよね。

……って作者が言ってたよ。

どうやら撞源は凄く疑り深い性格らしいんだ。

まぁ確かに、いきなり槍突きつけてそのうえ乙女（？）の肌をキズモノにするとこなんか人間性疑うね。

信じる心ってやつの大切さがよくわかったよ。

ヒロイン設定を話し終えると、撞源はやっと槍と腰を下ろした。

「そんなことがあったのか。まぁ人間の弱さは今に始まったものではない。彼らは目に見えないものに恐怖する。そして同時に、その力を自身も欲するのだ。強い人間は自分の力を信じるか、強い力を畏れる。しかしあに二人をなくしたのは人間にとっては大きな損失

だな。もしガーランドが魔王になれば、とめられるものはいないだろう。レイゲンやアデリアでさえもな」
マジすか！！！！？
「ガーランド（僕）ってそんなに強いの！！！！？」
……知りませんでした……。
「あぁ、私は勝てる気がしなかったよ。あの強大な魔力にあてられてな。情けない話だ。生まれたばかりの赤子に後込むとは……」
……ってことは、僕の魔力があれば魔王なんか目じゃないってこと……なのか？
僕超強いじゃん。てか最強ジャン。
そらぁ村の連中も僕を避けるわけだ。
さて、次は僕が一番気になるとこだが。
このために村を出て一人で旅してきたんだからね。
「魔王は今何してるんですかね？」

7話：最強じゃん（後書き）

実際ガーランドはこの小説に登場するキャラで最強です。その理由は後々わかりますが。

8話：魔王の側近

……今、魔王は何をしている？
そうだ、魔王に関しての噂は全くきかない。

「最後まで魔王と闘っていたのはレイゲンとアデリアだけだ。あの二人以外は魔王の最後を知らない。二人とも何故か話したがらないんでな。今はグラドールというやつが魔物たちの司令塔だ。それをベラミシアという別の魔女が補佐しているらしい。それ以上のことは知らんが」
どこかで聞いたことあるような……。
「グラドール……何者なんですか？」
ちょっと沈黙。撞源は探るような目で僕を見る。
「魔王の側近だ。恐ろしく強い。魔王とは比べるべくもないが、私は奴のおかげで一生車椅子生活だ。やってくれやがったよ。しかも若かったからな、この16年で更に成長したことだろう。魔王と闘う前に私の闘いは終わったんだ」
「そんな強い人が……」
「あぁ。ひどいダメージを受けたが、それでも奇跡的に全員無事だった。ま、中にはもう闘えなくなった者もいるがな。私もその中の一人だ。その辺に関してはブラインに聞くといい。アクアコートにいるはずだ」
「ベラミシアは？ベラミシアも魔女？魔女って何人もいるの？」
「ん？なんだ、知らなかったのか？魔女ってのはな、2種類いるんだ。一方は世襲型、親から子へ受け継がれる力だ。そしてもう一方は後継者、一人の魔女が死んだら、その魔女の持つ力が次の主人を求めて飛び回るんだ」

「……それって魔王も？」
「いや、魔王は別だ。死ねば滅びるのみ。だが稀にな、魔女が魔王の地位につくことがあるんだ。アデリアの母がそうだった」
……母さんは自分の母親と闘ったのか……。
どんな気持ちだったんだろう？たとえ魔王でも、自分の親と対峙するなんて。
グラドール、魔王の側近か……。
「グラドールは魔王じゃないんですか？」
「いや、奴自身は魔王とは名乗っていない。あれ程の力を持ちながら、魔王に心酔しきっていたんだ。名乗り出ないところを見ると、魔王を蘇らせようとか考えてるかもしれんな」
そんなことが出来るの！！？
「まぁ、不可能だろうがな」
……なんだぁ、無理か……。
とにかく、グラドールを探し出さなきゃ。いろいろ聞きたいことがある。
「グラドールはどこにいるんですか？」
「……それを知ってどうする」
「ガーランドを帰してもらわなきゃ」
（僕はただ、魔物が人を襲わなきゃそれでいい。それと、どうにかして元の体に戻らなきゃ。グラドールを探せばいつかブライに行き着くはず）
「その刀で闘えるのか？」
「どうしてそう思うんですか？」
「質問しているのはこっちだぞ！……まぁいい。裂神は生きてるんだ。主人を自ら選ぶ。自分の意にそぐわない者は容赦なく切り捨てるだろう。たとえ自分の主人でも。それにこの先は一人では危険だ。やはり勧められんな。私もこの脚では行ってやれそうもない」
「僕が行くよ」
「！！！！？」

ドアはちゃんと閉めたはず…どうやって中に？
声の主はガーランドが座っているソファの後ろに、背中合わせの状態で足を投げ出して座っていた。
少年は静かに立ち上がり、ガーランドの隣にドサッと座った。
「アクアコートの連中も連れて行けば大丈夫さ。この子は僕が守る。何か問題でも？」
……絶対ナルシストだよコイツ。
自分のこと好きだよきっと。
そして僕をただのかわいい女の子だと思って軽く落とせるつもりでいるよ。
「この娘が行くこと自体反対だと言ってるんだ」
……撞源さんがいい人に見えてきた。
「いざって時はアステルもいる。父さんは心配性なんだよ。僕たち全員が揃えばグラドールも顔色が変わるさ」
僕たち？
「……レイゲンとアデリアがいない今、グラドールにはかなうまい」
「心配要らないよ。ね♪」
僕に向かってウィンクしやがりましたよ。
コイツ絶対好きになれない。。

8話：魔王の側近（後書き）

撞源の息子の名前は次話に出ます。彼の性格は（ｆｆ９の）クジャとジタンを足した感じで考えてください。
それと、次話からはガーランドのことを「ベルニカ」と表記しますので、ついてきて下さいね。

9話：酷い客室（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありませんでした。

9話：酷い客室

息子雷撞が怒涛の勢いで説得し、撞源を折れさせる形でようやく許可を得た。

《仕方あるまい。確かに、全員揃えば嘗ての我々より……》

「じゃ、行こっか☆」

……え？こいつマジで一緒に来る気？

冗談。勘弁してください。

「あなたと一緒には行きたくないわ」

「？どうしてだい？」

「知らないわよ。生理的に受け付けないんだもん」

どうやら今の一言で雷撞の自尊心に多少は傷をつけることができたようだ。

「肩を落とす」とはこういうことをいうんだな、って思うほどしょんぼりしながら部屋を出て行った。

いい気味だわ。

さて、次に向かうのはアクアコートか。

今度はもっとましな人たちだといいな……。

そう思いながらとりあえず席を立ち、部屋を出たのだが。

すでに部屋の外に荷物置いて待ってましたよコイツ。

部屋を出てから2分も経ってないのに。
最初からついてくる気満々だったんだな……。
よくいる説得できないタイプだ。

こうして不本意な形ではあるが、私に仲間ができたらしい。
しかもさっきの二人の話しぶりから、雷撞の仲間がもっといっぱいいるのだろう。
撞源の様子を見た感じでは、おそらくかなりの戦力であるはず。
あまり他人に頼りたくはないんだけどなぁ……。
めんどくさいし。

「それじゃ、行こっか」
「おい！休んでいかないのか？翠蓮にはさっき着いたばかりなんだろう？」
後ろから撞源が声をかける。
そういえばそうだったな。
窓の外の景色は既に紅く染まっている。
「おっと、これは僕としたことが……。おいでベルニカ、部屋へ案内するよ」

雷撞の案内で私は一階の客室へ通された。
ドアを開けた瞬間、ベルニカの目は驚愕（@д@；）……
……こっこれは、なんという部屋か……。
客室がこんなもんでいいのか？

部屋全面ピンクで統一されている。

内装壁床天井果ては窓やドアノブ（！？）まで全てピンク。
…いったい誰のための部屋なんだコレは！？
ここまでピンクが好きなやつがいるのか！！？
「これは僕がやったんだ。うちに女の子が来たらこの部屋を使ってもらうんだよ」
……その女の子たちもさぞ無念だっただろうね。
「せっかくだから、君もこの部屋で休みなよ。じゃ、何か不足があったらいつでも呼んでね」
そう言って雷撞は部屋を出た。
……今の台詞、どこかおかしい……。
気のせいかな？まいっか。
変態の考えることなんてわかるはずがない。

そんな変態を理解することなんて早々に諦め、ベルニカは部屋を見回した。
それはそれは見事なほどに桃色であり、それ以外に形容する言葉が見当たらない。
でも色を無視すればそこまで派手ではないようだ。
しかし撞源もよくこんなの許したな。

……ふぅ、今日はなんだか疲れた。
口では言えないけど、森では大変だったからな……。
ピンクのベッドに大胆に倒れこむ。
ベルニカはそのまま意識が遠のくのを感じ、ゆっくりと目を閉じた。

9話：酷い客室（後書き）

やっと安定してきたようです（作者が）。
これからは週1か週2ぐらいで更新できればいいかなと思ってます。

次話は完全デレの予定です。

１０話：拷問（前書き）

前話のあとがきにデレを予告しましたが、どうも違うような・・・・

１０話：拷問

……夢だ。
光が一切ない暗い場所。
闇の中だ。
誰かが闘っている。
一方はこの前見た夢にも出てきた、私に似た女性。
もう一方は……父さんと母さんだ。
父さんは相変わらず獣のような闘い方だ。
母さんはそれを魔法でサポートしながら同時に攻撃する。
すごい闘いだ。
周りの空気が震え、大地に亀裂が走る・・・・ーーーーーー

「おはようございます、ベルニカ様」
「……お、おはよ……」
んぅ、私寝てたんだ。
着替えもしないで。
めっちゃ眠い……。
えっ誰？ベルニカ様？「様」？

なんだか可愛い声だったような気がするよ？
ベルニカが頑張ってまぶたをこじ開けると、ベッドの脇には猫耳カチューシャを着け、スーパーミニスカメイド服を着た女の子がこちらを眩いばかりの笑顔で見つめていた。

……かっ、可愛い……／／／／

微かに赤みを帯びたショートヘアーで、顔立ちは綺麗に整い、目が凄く大きい。
そして、グレイティストマッチングしている猫耳。
まさか猫耳がこれほどの破壊力をもっていようとは……。
ティアたちの気持ちがなんとなくわかったような気がする。
不覚……。

ベルニカはしばらく真っ赤な顔で呆然と彼女の顔を見つめ、それに気づいたスーパーミニスカグレイティストマッチング猫耳メイド女も、見る見る頬が桃色になった。
「あっ、べ、ベルニカ様。……朝食のご、ご用意が……／／／／／／」
……朝食？あぁ、そういえばここ憧源の家だっけか。

しかし雷憧……メイド好きか？

メイドが好きなのか??
要は果てしなく変態なのだな。
「あっうん、今行くよ」
起き上がった私はすぐさま異変に気づいた。
……まさか雷憧じゃないだろうな?
それともこの女が?

ベルニカはいつの間にかパジャマに着替えさせられていたのだ。
昨日は疲れてそのままベッドに倒れこんだはず。
猫耳女を振り返り、パジャマを指差して言う。
「あの、これって……」
すると猫耳女はさっきよりも更に顔を火照らせて俯いた。
顔から湯気が出そうだ。(私も湯気が!!!)
お互い目も合わせられず、私は黙ったまま猫耳女について歩いた。
……事件だよ……大事件……。
いくら今は女の体とはいえ……謂れもなく拷問受けてるよ私……。

オンナニ、サワラレタノ?
もう顔の色が元に戻んない(T_T)

食堂には既に憧源と雷憧がいた。
私は猫耳女に促されるまま椅子に座り、二人を見た。
「おはようベルニカ。よく眠れたようだね。アリスは気に入ったかい?」
……この猫耳女のことを言っているらしい。

アリスはまだ顔を赤くしたままだ。
私も顔が熱くなり、すぐ顔をそむけた。
〜〜〜恥ずかしいよー！！
「ふふっ、どうやら仲良くなれたようだね。アリスはうちのメイドなんだ。誰が雇ったかは……訊かないでくれると助かるよ」
……哀れなご趣味をお持ちでいらっしゃる。
雷憧の性格は親譲りかも知れないな。
この変態親子め、顔赤いぞ憧源。
雷憧が合図をすると、アリスは次々と料理をテーブルに並べた。
料理だけは和風らしい。
食べたことないものがたくさん。
その前に見たこともない。
でもどれも美味しそう。

……うん、まぁ、料理はとても美味しかった。
アリスが作ったんだろうか？
食べている間中アリスは私の顔を、やはり頬を染めながら笑顔で横から覗き込んでいた。
アリス……近いよ……もう拷問はやめて……。
私は恥ずかしすぎてあまり食べられず、すぐに箸を置いてしまった。
むしろアリスの笑顔だけでお腹いっぱいです。

私が部屋に戻ると、なぜかアリスがついてきた。
「ん？アリスどうしたの？」
アリスは何故かモジモジしながら、散々迷った末にこう言った。
「べ、ベルニカ様、お風呂の準備ができております……」
「あーありがとー」
……今何を迷ってたの？
「で、その……よろしければ……お背中流しましょうか！？／／／／／／」
／／／／／／！！！／／／／／／！！／／／
なんでそこで赤くなるのさ！！？
アリスはあれか。そっち系ですか。
あぁ、顔が熱い……。
あ、アリス待って、そんな悪魔の笑顔で近づいてこないで。
その手つきはなに？
気持ちエロく感じるんですけど？
ちょっと、ねぇ……誰か助けて〜〜！！！！！！

天国のお父さん・お母さん、お許し下さい。
私はもう男には戻れません（T｜T）
何故私はこんな拷問を受けなければならないのですか？

１０話：拷問（後書き）

ベルニカの心に、またひとつトラウマができたようですね。
作者は悲しいです。

11話：アリ中

魔のお風呂から上がった私は黙ったまま用意されていた服を着、荷物を持って玄関ホールへ急いだ。

思い出してはならない。
絶対に思い出してはならんぞベルニカ！
自らの血の海にひれ伏したくはないだろう？
見た目が男でも女でも、鼻から下を真っ赤に染めたくはない。

それにしても、まだ全身が熱い。

主に顔が。

あのあと私はアリスの手から逃れられず、捕まってそのままお風呂へ連行された。

そう、あの魔の空間へ。

そして服を、脱が、脱がされ……アリスは私の体、を、キレイにしてくれました。
キレイに、してくれたのですが……逆に汚されてしまったような気分です。
その上死にたいような心境に陥ってしまった私。

これ以上詳しく説明することはできません。

アリスと同じ空気の中にいると私はダメになってしまう気がしたから、逃げることを決意しました。

とにかくアリスから離れなくては。

大声で雷憧を呼ぶ。

「雷憧〜！！」

「なんだい？」

「……」

雷憧は既に玄関ホールにいた。

「よかった。もう準備は出来てるんでしょ？早く行こっ」

「なんでそんなに急いでるんだい？」

「アリスから逃げるの！」

男としての私の心（ガーランド）が罪悪感に苦しみ、体に引っ張られて徐々に女に近づいている私の心（ベルニカ）は自分が百合になることを全力で阻止しようと奮闘している。

私は男の頃（ガーランド）からあまり女に興味を抱くことが無かった。

それはおかしいことだろうか？

どうだろうか？

でも女の体になって、女の子としての羞恥が身についてからは逆に酷く反応してしまう。

……なんでもいい、とにかく今は逃げることが先決。

「早くしないと……」

「……後ろにいるよ？」

「……（ニッコリ）」

「……（汗汗汗汗汗汗）」

……せっかくお風呂に入ったのに、私は全身冷や汗でびっしょり濡れてしまった。

彼女は私の期待を裏切らない笑顔でこちらを見つめているのだろ

う。
……いけない、振り向いたら負けだ。
振り向いたら死ぬ！

あぁ……私はどうしてしまったのだろう？
アリス中毒（アリ中）になりかけてしまっている。
あの眩いばかりに輝く笑顔は、私の四大欲求の一つに勝手に立候補しやがった。
ありえない
……もう一度言います。

ありえません！！
なんとしても振り払わなければ。
アリ中はそうとう性質が悪い。
麻薬みたいなもんだからな。
いや、もっと酷いかもしれない。

私は雷憧に目で訴えかけようとしたが雷憧は理解せず、首をかしげている。
後ろにいるアリスはやはり笑顔で私の後姿を見つめている。

……見なくてもわかる。
うぅ、怖いよ～！！
誰か助けて……。

ふと私は頬に違和感を覚えた。

え、何これ？

両頬になにかが流れ落ちてくる。
それはゆっくりと顎に伝い、床にダイブした。
「アリス、外して」
雷憧がアリスに言う。
アリスは戸惑いながらも、頭を下げてから去っていった。

雷撞は悲しむというか、哀れむというかそんな感じの表情をしていた。

私は雷憧の表情を見て理解した。
これは、涙だ。
目から流れる雫。
私、泣いてる？

12：理由

私、今まで一度も泣いたことが無かった。
生まれ落ちてからただの一度も。
父さんや母さんが死んだ時だってそう。
まぁ当時2歳だった私には『死』というものが見えていなかったのかもしれない。
でも周りの人が泣いてるのを見て、嬉しい時や悲しいときなど、感情が溢れる＝涙が出るという認識をしていた。間違ってないよね？
じゃぁ、今の私は？なんで泣いてるの？
「雷憧、私、なんで泣いてるのかなぁ？」
雷憧に訊ねてみた。答えなんか期待してなかった。
ただなんとなく言ってみた独り言みたいな感じ？でも、雷憧は答えた。
「ベルニカは人を怖がってる。人と仲良くなることを、人に好かれることを畏れてるんだ」
「…？」
…そうなの？私、人と仲良くなりたくないの？
今まで私と仲良くしてくれたのはティアと魔物（ブライとか）だけ。
人に好かれるようなことをした記憶は一切ないし、魔女の子どもだから実際好かれてなかっただろう。
そして好かれようと思っていなかったわけだ。
ま、母さんを殺した奴らだ。一生好きにはならないだろうが。
もし雷憧の言うとおりなら、私はアリスと仲良くなることを拒否しているということ？
ある意味好都合なんだろうけどさ。
アリスのこと嫌い？ううん違う。
頭の中で独り自問自答するベルニカ。
雷憧はそっと口を開く。

「泣くなベルニカ、男だろ？」
笑顔でそう言う雷憧。
含みのある笑顔で。
しかし！ベルニカはそれに気づかない。
…男は泣いちゃダメってこと？じゃぁ私は泣いちゃ…？？
！！！？おとこ！？
オトコ！！？
今！コイツ私のことおとこって言ったのか！？
おとこってなんだ！？
漢字の漢と書いてオトコか！？
それともあれか？音子（オトコ）か！？
なんかよくわからんけどここは全力で否定というか、えと…うん、とにかく否定だ。
「あ、あんたどこに目ん玉つけてんの！？なんで私がおとこなのよ！？」
クスクス笑う雷憧。ウガーッ！こいつイライラするー！クスクス笑いなんてこの世から滅んでしまえ！なぁポッター、君もそう思うだろう？
「男だろ？って言った後の間がその答えさ♪」
答えになってないし！
クソッ！コイツのこと舐めてた。
なんでバレたんだろ？
いくら態度が男っぽかったとしても、体は女なんだからそんなことあり得ない！
いつから気づいてた？
「僕に隠し事は出来ないよ？ガーランド♪」
…ｏｒｚ終わった…。
もうコイツと一緒に旅は出来ない。
まさか読心術が使えるとは…これならアリスと一緒の方がまだましだ。

涙も一瞬で乾いちゃったよ。
やっぱり独りで行くことにする。
いちいち心読まれてたら信頼関係なんて築けるはずがない。
そしてさぁ、今更ながら気づいたことがあるの。
それは今私が着ている服。
黒を基調とした…これで判った人もいるはず。
ゴスロリですょ。
風呂からあがるときアリスから逃げることに必死で、用意されてたものを何も考えずにそのまま着ちゃったんだよね…（ツッコミ不要）。
とにかく無理なものは無理だ。ここは素直に拒否っといた方が無難だろう。
「無理。やっぱりアナタと一緒にいたくない。私一人で行くから」
「どうして？女の子の一人旅は危ないよ♪」
「（怒）（怒）（怒）（怒）（怒）（怒）（怒）」
とりあえず69発殴ろう。
主に頭部。
上手くいけば記憶喪失にさせることができるかもしれないし、こんな変態死んだって構わないじゃないか。
むしろ私の秘密を知っている者は消してしまえ。
ジェノサ～イド！！
てかお前さっき私が助け求めてるの知ってて無視したのか！
極刑だ…頭の皮を剥がしてやる…。
そんな私の考えを読んだのか、それとも私の形相がそれほど凄まじかったのか、雷憧はひきつった笑いを浮かべて逃げてった。
これで邪魔はいなくなったな。
…！
物凄く疲れたけどいかなきゃ。

ここにいるとマズい。
非常に。
だってすぐそこの部屋の扉が少し開いてて、顔を赤くした赤髪の猫耳女がこちらの様子を窺っていることに今気づいてしまったんだもの。
…あなたいったい何者なんですか。
今の会話で私の正体判ったでしょう。

つまりアレか。
男でも女でもイケるってやつか。
両刀使えるわけですか。
その上猫耳ですか…。
いかん、また心をやられる前に先手を打たなければ。
私は少し開いた扉に向かって、今私に出来うる最も可愛い（と思われる）太陽の如く全てを照らし出して人々を無条件で幸福の絶頂へと導くかのような笑顔を解き放った！
アリスの顔が爆発した！
８６２のダメージ！
アリスは倒れた！
ベルニカはアリスをやっつけた！
１０５００の経験値を手に入れた。
ベルニカはレベルが上がった！
賢さ＋３１、かっこよさ＋２９、プライド－９９、０ゴールドを手に入れた…。

１２：理由（後書き）

だいぶ更新が遅れてしまいました。
申し訳ございません。

まだ調子が戻りません。最初の頃のようにほぼ毎日更新できるようになる日は来ますかねぇ・・・・

13話：返事がない。ただのしかばねのようだ。

私は急いで憧源の家を脱出。
さすがマッ○。
スマイルが0円という噂は本当だったのか。
うん、別に感心するようなことじゃないな。
でも嘗てスマイルを注文して
「あ、売り切れです…」って言われた人がいるらしいから、これからチャレンジしようとしている勇者(あほ)は気を付けて挑んでくれ。
私はそんな君を一生応援し続ける。

若干落ち気味のテンションでアクアコートに向けて歩き出そうとした。
…呼び止められた。
「おいそこのゴスロリ娘。お前旅の者か？」
すごいみすぼらしいおじさん…いや、おじいさんかな？

どっちでもいいけどさ。

酷い格好だよ？
髪汚い、顔汚い、服汚い、肌汚い、ズボン汚い、裸足汚い、言葉遣い汚い。
7冠王（7冠汚）だ。
「ん、私？そうだけど」
確かに今私はロリ体型で（それでもでるとこはでてる）ゴスロリファッションなのだから否定は出来ない。
フリフリ付きすぎだ。
でも初対面でいきなりそんな言い方はないでしょうよ。

「お前旅の扉っつー物を知ってるか？」
…ドラ〇エ？じゃないよね？
そんな都合のいいものがあるわけ…。
ベルニカは首を横に振る。
「旅の扉はな、離れた場所にある別の旅の扉にとぶ為の装置じゃ。この付近で妙なものを見ても無闇に近づくなよ。あれは今故障しているらしい。何もないところで不意に目の前に現れたりもするしな。行ったら最後、二度と戻れなくなる」
…旅の扉って故障するんだ。
てかもろドラ〇エじゃないか。
そんなのありですか？
もしこれがゲームだったら…行けって言ってるようなもんだよな。
まぁ戻れなくなるんじゃしょうがない。
全部用事を片づけて暇になったら行ってみようか。それにしても、
「その旅の扉って、どこに繋がってるんですか？」
当然の疑問だろう。
同じ世界のどこかに繋がってるんなら、どうにかして戻ってくることが出来るはず。
「異世界じゃ」
「異世界！？」
…戻れないはずだ。
しかし異世界に旅の扉を作るなんて…普通無理だろ。
作者め、いったいどういうつもりだ？
「この世界とは違ってかなり技術が進歩したところじゃ。武器も必要無いほどに平和じゃしな。儂も嘗ては向こうへよく行ったものじゃ」
技術が進歩した…？
この世界で作れそうにないものが存在しているのは、そういうことか？　「たとえば？」とかいう質問は無しね☆
向こうの世界から持ってきたから…お、もしかして私の体も元に

戻せるのかな？
もしそうなら行く価値アリだ。
問題はどうやって戻るか…。
「何故故障したんですか？」
それがわかれば直すヒントぐらいにはなるはずだ。
「そんなもん、儂ぁ知らん！」
…だよね～。
「そう。ありがと、おにーさん♪」
私のプライドはとうに末期肺ガン患者の肺のように真っ黒く醜くなってしまったので、さっき捨ててきた。
どうだ、私の乙女パワー！
おじさんは顔を赤くした。
更に追撃だ。
私はおじさんに近づき、上目遣いでこう呟く。
「後で…私とにゃんにゃんしようね♪」
二筋の赤い滝が盛大に流れ落ちる。
勢いが凄すぎて赤い水分子が霧のように舞っている。
さながらエンジェル・フォールだ。
血液を放出しきったおじさんはちらりと私を見る。
私がウインクするとおじさんは真っ青になって倒れた。
うん、すごい威力だ。もしかしたら魔王をも倒す破壊力を秘めているのではなかろうか。
でもこんなとこで倒れられても迷惑なんだよね。
「おにーさん、起きてよ～」
…返事が無い。ただの屍のようだ。
…否、よく見るとおじさんは薄目を開けている。
気絶したフリをして何かをずっと見続けている。
おじさんの視線は…私の、す、スカート…。

おじさんには本当に屍になってもらいました。
具体的に何をしたのかは出来れば聞かないでほしい。
ただ、マジで返事がなくなったことをご報告します。

はぁ、男ってサイテーだ。
こんなにも汚い醜い生き物だったとは…元・男としてとても恥ずかしいです…。
「さて、気を取り直して、アクアコートへ行くぞ☆」
ある意味波乱続きな私の旅。本当に大丈夫だろうか？

１４話：アクアコート

ハイッやってきました、こちらはアクアコートです。ん～マイナスイオンたっぷりですね。

ここアクアコートは水の都と呼ばれております。ご覧下さい、街の真ん中には見る者を圧倒する巨大な噴水が堂々とそびえ立っているのが見えますでしょう？その巨大な噴水のそばで子ども達が楽しそうに水遊びをしていますねー。

ここアクアコートは建物のつくりがイリスや翠蓮とは違い、憧源さんの家に近い形になっています。たまに派手な色も目立ちますが。

街中いたる所に水路が張り巡らされており、街の端までたどり着いた水は地下に流れ落ち、地下浄水施設を通った後にまた中央の巨大な噴水の下へ集まるのだそうです。

建物の二階から顔を覗かせる病弱っぽい少女に一瞬気を取られたベルニカは水路の水に勢いよく足を突っ込んでしまった。

「ついてないな…さて、誰を探せばいいんだっけ？」

アクアコートについては、父さんからは何も聞かされていない。確か憧源は、ブラインに聞けって言ってたな。捜してみるか。

とりあえず私は中央の噴水を目指しながら、道行く人に「ブラインさんという方をご存知ないですか？」と訊ねまくった。

「んー憧源は一発だったのに。ブラインってどんな人なんだろ？」

いつの間にか噴水広場にたどり着いていた。広場では子ども達が元気に遊び回っている。

平和だなぁ。

ふとその子ども達の中に、知ってる顔を見た気がした。あれ？今の…気のせいかな？子ども達の顔を一人一人見てみた。…やっぱり気のせいだ。どの子も知らな…

ドン！

後ろから衝撃を感じた。振り返ると、そこには小さな女の子が尻餅をついているのが見える。前にも似たような展開があったような…。

「大丈夫？怪我は無い？」

女の子を立たせ、汚れを払いながらそう言った。ちょっと涙目だったが、頷いたから大丈夫だろう。

…翠蓮の時と同じこと言ってるぞ。ってことは、あの時の子？あまり覚えてないけど似てるような…でもまさか…。

「ねぇ、ブラインさんって人のお家知ってる？」

「…うん」

頷くと、女の子は脇目も振らずに走り出した。やっぱり。あの時とまったく同じだ。

私はまた、女の子の後ろを着いていく。あぁんもぅ、靴が濡れてるから走りづらい！女の子は一切の迷いも見せずに走り続ける。

15話：ブライン

右に曲がり、橋を渡り、階段を上り、左に曲がり、また左に曲がって橋から飛び降りた。

「！！ちょ、ちょっと！！！」

急いで私も飛び降りる。

女の子はまた走り出し、右に曲がって立ち止まった。私は数秒後に追いつき呼吸を整えながら、驚嘆の眼差しで彼女を見た。　こ、この子、どんだけ走るのよ…私にぶつかる前から走り回ってたんじゃなかったの？

女の子は振り返り、息一つ切らさずにベルニカを見つめている。

完全な無表情で見上げ、後ろにある扉を指して口をパクパクさせた。…？

「もしかしてあなた…話せないの？」

「…うん」

どうやらこの女の子、話は出来ないが

「うん」だけは言えるらしい。

私は少女の指し示す方向を見た。古くなった石造りの建物で、面した壁に窓は見当たらない。民家か否かが判別出来ないが、隅にある下りる階段の途中に真っ黒の扉があるだけだ。ブラインは地下に住んでいるということか。

でもこの子、何故ここを知ってるの？それに、憧源の家も。

少し目を離しただけなのだが、少女はまたも姿を消していた。

ちぇ、またお礼言えなかった。何者なんだろうあの子。まいいやどうでも。どうせまた会えるだろうし。ていうか向こうから接触してくるはず。

ベルニカは黒い扉のドアノブに手をかける。

おっと、不法侵入するとこだったぜ。

ドアを観察。ノックもインターホンもないし、覗き窓らしきもの

もない。
さぁどうするベルニカさん？

…決めた、不法侵入しよう！
再びドアノブに手をかけ、無造作に捻る。

開いた。素早く中に入り、静かにドアを閉めた。そして振り返るとそこには…仮面！！！
「！！キャーーッ！！！！！」
「五月蝿い。黙らんと、加齢臭と犯罪の匂いが漂うオヤジしか乗ってない満員電車に放り込むぞ」
魔王ですら嫌がりそうなことをあっさり言ってのける、仮面を被ったヤツ。男か、女か。微妙な高さであるため、（そして平常心を乱されたため）声だけでは性別を判断できない。背はベルニカより少しだけ高いが。
「…マンインデンシャって何？」
この世界に電車は無いため首を傾げるベルニカだが、なんとなく嫌そうな顔をしているのは
「オヤジ」の部分にいやな予感を感じ取ったからに他ならない。
仮面は無言できびすを返し、ゆっくり階段を下り始めた。後に続くベルニカ。思い切って不法侵入したはいいが、元々無計画で部屋の中は暗くてよく観察出来ない上に正体不明（意味不明でもある）の仮面が気持ち悪い。どんな仮面かって？真っ白。何も無い。鼻も口も。装飾以前に、目の部分にあけるべき必須の穴さえも無い。つまり、この仮面野郎は前が見えない状態で、暗い階段を躊躇いなく下りていくのだ。
「…レイゲンの息子だな？」
「…！！？」

またバレた！しかも会って一分も経ってない。こいつも雷憧と同じなのか？
「なんでわかるの？」
「…娘が教えてくれたのさ」
白いソファに座りながら呟く。
「娘？まさかさっきのあの子…？」
「…うん」
ソファに座ったベルニカの隣に、あの子がいつの間にか座っていた。驚愕に一度体から飛び出し、二回深呼吸してから体の中に戻ったベルニカの心臓。でも深呼吸は無意味。まるで小さな爆発を何度も起こすかのように肋骨を乱打する。今にも呼吸困難を起こしそうだ。「い、いつからここに！？」
「…最初からいた。気づかなかったのか？お前と一緒に座っただろう」
き、気づくわけ無い！扉が開いた気配もなかったのに…。ほんとに何者なの！？そしてこいつも。仮面に向き直る。
「ねぇ、あなたがブライン？」
ここにいるってことはそうなんだろう。ブラインは頷く。
「じゃぁ、私が何しに来たのか知ってるわよね？」
隣に座る少女を見ながらいう。この子が私の正体を知ってるのなら当然わかるはず。
「グラドールは一人で倒せる相手ではない。ベラミシアもいるしな。それと、そのままでもいいんじゃないか？別に体が男でも女でも、生活に支障はないだろう」
ぐ…確かに、女の体は面白いけどさ。てゆうか顔を見せろコノヤロウ。ほんとはその仮面の下で爆笑してんだろが。
「マリナはそのままのお前を気に入ってるようだぞ？」　マリナ？私はまた隣を見た。そこにはさっきまでいた無表情な少女ではなく、顔を赤くして俯きながらも私の手を恐る恐る、そぉっと握る少女が…え？ナニコレ同一人物？ホントに？そしてナニコレ？私のこと、

男と女どっちだと思って顔赤らめてんのさ？
「マリナはどっちでもイケる派だぞ」
Σ（@д@；）
「お前本当に親か！？危惧すべき大問題だぞ！？よくもそんなことを平然と…」
　言いながらマリナの様子を窺ってみた。…さっきより顔が赤い。なんだそれは？肯定ということか？マリナはどんどんベルニカに近寄っていき、最終的には抱きつく形で落ち着いた。目を瞑り、ひたすらぎゅっとしている。なんか幸せそうだ。恋する女の子を見るとなんだか微笑ましいよね。でも私はロリコンではないし、人を好きになることもない（アリスは例外。だってアレ反則じゃん）。かといって無理矢理引き剥がして癇癪起こされても困るので、放っとくことにした。
「憧源は私のガーランドこと、魔王の器だって言ったわ。そう簡単にやられはしないし、それにグラドールに会って話が出来ればそれだけでも収穫。別に闘う必要性なんて元から無いんだから、何も問題ないわよ」
　ブラインは動かない。魔王の器発言に驚いているのか、又は笑っているのか…たぶん後者だろうな。
「良い食材と下手くその料理人の組み合わせ…言ってる意味がわかるか？」　馬鹿にすんな。
「いくら良い道具を持っていても、それを扱うやつに才能が無ければ持ち腐れってことでしょ！」
　ブラインは軽く頷き、次はこんなことを。
「お前はどうなんだ？」
　馬鹿にすんなったら！
「イリスにいる頃から魔法の練習はしてたわよ。てか、闘わないって言ってるでしょ？」
「甘いぞ。生きてる限りお前は奴らに狙われ続ける。自分をもっと正確に捉えることだ。お前は魔王だぞ？奴らからすれば、どんな犠牲を払っても手にすべき魔の象徴だ」

15話：ブライン（後書き）

イライラするほどの長い間、待たせてごめんなさい（ーｏー；）
どうも調子が安定せず、外に出ることすら出来ませんでした。
現在狼☆さんに、シリーズの別作品を書いてもらってます。投稿するのはだいぶあとになるでしょうが、『魔女の子ども』と併せて読めるようなものになるはず。

16話：異能

魔の象徴……私が？……確かに、半分は魔王足り得る力を持つ魔女の血。でも、もう半分は人間の血。醜い人間の血……。いっそのこと、人間じゃない方が良かったって思ったこともある。私の半身は、母さんを恐れて殺した奴等と同じ、人間なのだ。

そのとき、マリナが急に強くベルニカを抱き締めた。

「……うぅ、ぅぁ」

「ん？なに？」

顔の赤みが少しひいたマリナが下から見上げている。何か言いたげだが私にはわからない。

「慰めようとしてるのさ。その子は感情の変化に敏感なんだ。珍しいぞ？滅多に口を開かないマリナがここまで必死になるのは」

マリナはじっとベルニカの目を見つめている。……私の気持ちを……？

「その子の母親は悪魔だった。マリナを生んだときにそれがバレてな、追い出されたのさ。母親は何度もマリナに会うために努力したが、街の人々は受け入れなかった。そしてマリナは事あるごとに『悪魔の子』として虐待を受けていたんだ」

……私と、同じ？ていうか、私より酷くない？まだ小さいのに、

ずっと辛い思いをしながら……。

「8歳の頃に言葉を失って、心を閉ざすようになった。その翌年に私が引き取ったのだが、未だに心を許してはくれないようだ」

「心の傷？それで失語症に……てかあんた肉親じゃないんだ？」

「あぁ、私は元々バイゴンの出身でな。闘いが終わって、初めてアクアコートに来たときにマリナに会ったんだ。お前、この子を連れてってくれないか？お前なら、この子の言葉を取り戻すことが出来そうだ」

「私が？大きな闘いもあるかもしれないのよ？連れては行けないわ！」

「心配要らない。その子の父親は翠蓮の出身だ。マリナには『才能』がある。足手まといにはならないし、きっと役に立てるはずだ」

「……才能？」

そのときベルニカはお腹の辺りをぐいっと引っ張られるような感覚を覚え、その直後にマリナと二人で噴水広場に立っていることに気づいた。同時に吐き気の存在にも気づく。長く喋っているつもりは無かったが、太陽は既に沈みかかっていた。

「……テレポート！？」

マリナはコクンと頷く。私に抱き着いたまま。

「翠蓮の出身か……道理でさっきの神出鬼没ぶりが成せるわけだ。憧源の家でも話全部聞いてたのね」

抱き締める力が少し強くなる。不安そうな表情で目を逸らした。

「大丈夫よ、別に怒ってないから。それより一つ聞いていいかな？」

顔を上げて私の目を見つめるマリナ。私はさっきからすごく気になっていた疑問をぶつけてみた。

「ブラインって男？女？」

だって声も恰好も判断材料にならないんだもん。仮面被ってるし。

「私」を一人称に使う男もいるからね。どうなのさ？マリナは自分の親指を指差した。ってことは……

「男なんだ……」

声たけぇな。まぁ、予想通りだけど。するとマリナ、今度は小指を指差す。

「えっあ、女？」

なにそれ！？どっちなんだ？マリナは両手を下ろし、首を横に傾けた。

……？？？

「……わかんないの？」

「……うん……」

（「○」；）……何年も一緒に暮らしててわかんないのか……。ブラインもなかなかの曲者だな。父さん達の仲間は常識的な人が存在しないのかな？

既に空は暗く、街の外に出るには遅いのでベルニカはマリナを連れてホテルに向かった。途中、お城のような外観の妖しい建物を見てはしゃぐマリナを無理矢理引っ張る。まさかこんないたいけな少女を連れてこんな如何わしいとこに入るわけにはいかない。しかも今の私達は同性同士だ。ある意味で危ないでしょ？その上……

「んぅ、うぁぅむ／／／……」

マリナがさっきから私を抱き締める腕を離そうとしないのだ。本当に幸せそうな顔をする。でも……

「……部屋は、別々にしようね？」

１６話：異能（後書き）

この作品には批評してくれる人がいません。それは、この小説の悪い部分を作者が気付きにくいということであり。

ご指摘下されば、この小説はもっと良いものになるかもしれません。どなたか御言葉をくれませんか？

17話：傷が治る

ホテルにチェックインし、部屋に入る。部屋は暖色系の矩体でどこか（何故か）薄暗く、光源は幾つかのダウンライトのみ。内装はごくシンプルなものだが、一際強く自己主張するものがある。

ベッドだ。

枕は二つ置かれており、真っ白だが照明のせいかピンクにもオレンジにも見えるシーツが敷かれている。

「……今日は疲れた……」

裂神をベッドの脇に立て掛け、そのまま倒れ込む。あれだけ走らされたし、マリナのテレポートに伴うあの引っ張られる感覚は一生好きになれないだろう。軽く転移酔いしてしまっていた。ゴスロリ服服を着替えるのも煩わしくなり、ベルニカは目を閉じて夢の世界へと旅立った。

子ども達が通りを元気に走り回っている。
古い石造りの建物が無秩序に建ち並び、砂浜から海風がそよぐ。

高い外壁に守られ、のどかな光景が、平和な世界がそこにはあった。そこは、イリスだった。建物の形や村の雰囲気から見ても、それは間違いない。だが、その景色にベルニカは違和感を覚える。今のイリスはこんな感じじゃなかったはず。外を自由に子ども達が遊び回ってるなんて、13年前ブライが村を襲ってからは滅多に見られない事だった。

不思議とベルニカは夢を見ている感覚ではなく、過去の映像を見せられているような感じがした。

「イタッ！」

目の前で遊び回っていた子ども達の一人が転んだ。……この子幾つだろう？見た目は1歳ぐらいにしか見えない。でも走り方やその速度、そして周りの大きい子達と普通に喋りながら遊んでいた所を見ると、単に成長が遅れているだけかもしれない。

「ミィ、ダイジョブか？」

4歳くらいの男の子が背後から声をかける。転んだ女の子は自分の足を呆然と見ていた。ベルニカが覗いてみると、足下には血溜まりと、血が付いたガラスの欠片。転んだ拍子に落ちていたガラスが刺さったのかと思い、女の子の足を見たが、そこでベルニカは信じられないものを見た。

傷が治っていく。

「どーかしたの？」

いつまでも立ち上がらない女の子を不思議に思い、男の子は正面にまわって覗き込む。怪我らしい怪我は無く、足下には血溜まりとガラスがあったが、男の子は気にした様子も無かった。

「ほら、いこっ！ミィ」

「……！う、うん……」

女の子は立ち上がり、また遊びに加わっていった。

１７話：傷が治る（後書き）

今回の話しは、今後投稿予定の作品とリンクしています。
【魔女の子ども】だけではなく、シリーズ全体を見渡しながらの同時執筆は結構大変。いつ完結するのやら……。

１８話：再会

「ん……んぅぅ〜〜っ」

ベッドに横になったまま、ベルニカは軽く伸びをする。窓からは薄いカーテンを通して陽がさしかけている。少し日が高い位置にあり、だいぶ長く寝ていたことに気付いた。

今の夢は、何だったのだろう？独りでに怪我が治っていく少女。他の子ども達には見覚えがあった。今ではもうみんな大人になった彼らの顔に、夢で見た子ども達の面影が重なる。年の頃から計算すると約１５年前、私が生まれる前後くらいだろう。しかし、あの少女だけは全く覚えがない。私が生まれる前にいなくなったということか？最近は妙な夢をよく見る。

「熱い……」

少し汗をかいている。お風呂に入ろうと思って体を起こそうとしたが、それは失敗に終わった。胸の下の辺りに何かが巻き付いてる。右足にも何かがまとわりついてる。ていうかもう布団が盛り上がってるし。そして何よりスヤスヤと……。

「……この子相手に戸締まりは無意味か（Ｔ＿Ｔ）」

二部屋とった意味がないじゃないか……ｏｒｚ。っていうか、私が最初に気付いておくべきだったな。テレポーターを閉じ込めておくことは絶対に不可能だ。はぁ、気が休まらないな。安心して眠ることも出来ないよ。

さて、マリナちゃんはどんな寝顔をしてるのかしら？そぉっと布

団をめくる。ベルニカはギョッとした。マリナの寝顔よりも何よりも先に目に映ったのは、自分の服だった。……何故？なぜナゼどうして私はいつもいつもこんな目に遭うのさ！？

……皆さん、どうか聞いて下さい。ワタクシ、実は悩みがあるのです。それは背が低いということではなく、非力であるということでもなく。女の子になったということなんか、もうとっくに諦めました。ワタクシの悩みというのは、マリナと一緒に……いや、女の子と一緒に旅をするということ！『（・―・；）エッ・・？』って思った人、今から私が殴りに行きますよ。

今、私は汗を流すためにお風呂に入りたいのですが……入れません！！何故かって？決まってんじゃん。アリスの件でトラウマになってるのに、マリナにまでセクハラされたら私……

……

……

……

腹を斬る準備は出来てます！！！

てかまず一緒に入る時点でもう堪えらんないんですけど。鍵閉めてもマリナには意味無いし。……その前に、一緒に入る前提でしか

話が進まないのがすごく不愉快。私には『一人でお風呂に入る』という選択肢が与えられないのです。メンバー的に。撞源の家では地獄だった……。

「うん……ぇぅ、にぃか」

（≧≦∇≦；）

寝言言ってるー！しかも今なんか『ベルニカ』って言ってるように聞こえなかった？

「ぅぃに、あぅ……ぶっ」

……なんだ今のは？『ぶっ』って……あぁ、もういいや突っ込むのやめよ。それにしても、寝顔ってのは誰でも可愛く……ぅあぁ！！！よっ、ヨダレ！？ちょっ、ヤバイでしょこれ！お臍（ヘソ）にヨダレが溜まってくし！！

「マリナ！起きてよ！」

「む、いいすぅ？」

不意にお腹を引っ張られる感覚がした。目の前の風景が暗転する。
あぅ、気持ちわる……。

暗闇の次に目に映ったのは、木の天井と石造りの壁。どこか見覚えのある景色にふと懐かしさを感じながらも、ベルニカは嫌な予感と同時に鳥肌がたった。

「……ガーちゃん？」

幼馴染みの声がした。

１８話：再会（後書き）

ちなみにベルニカ、完全に透けてしまっている“何か”を着せられていました（笑）

評価・感想、メッセージを下さった皆さん、ありがとうございます。ワタクシ、とてもやる気が出ました。（更新が遅いことに変わりはありませんが）

もうそろそろ別作を投稿しようかとも考えています。未定ですがね。

19話：ある日の曇り空

あぁ……今風呂場の床を流れていくのはお風呂の湯か、私の涙か……。

《あまりにもベルニカが可哀想なので、割愛させて頂きます》

「うをぅ～、ぁん」
「うん、大丈夫。貸したげる」

二人の着替えを持ってきたティア。小さい方をマリナに手渡し、自分は荒い呼吸でベルニカに向かう。妖しい目付きを向けられている当の本人は、未だにショックから脱しきれないでいた。

「……（´Д`）ァーー……」

最早魂を手放してしまっているようだ。
息子を人質にとられたグランバニア王の如く、全く抵抗というものをしない。
無気力なマネキンと化してしまったベルニカに、ティアは猫耳&メイド服を装備させた。その完成品を目にし、急激に広がってゆく果てしなく危険な世界（妄想）に必死で鼻血を止めようとするティア。
今にも襲い掛かりそうな形相だが、何やら不満そうな顔でポカポカ叩いてくるマリナに、寸でのところで阻まれた。

「……イヤなの？」
「ぅん」

どうやらマリナはメイド服が好きではないらしい。
必死に哀願するマリナの愛くるしさに一瞬心を奪われそうになったティアは、仕方なくベルニカをまた着替えさせた。着替えさせる間は両手が塞がっているため、鼻血は垂れ流し状態。イリスを出た時と同じく白のYシャツに黒のミニスカートという格好だった。途端にマリナがベルニカに抱きつき、装備したままの猫耳をコリコリして嬉しそうな顔をした。……マリナも猫耳属性か。

「傷口が塞がらないよ……」

ようやっと意識を取り戻したベルニカは、呆然としながらぼそっと呟く。無論見た目には怪我などしてはいないのだが。

「時間が解決してくれるよ♪」
「んぅ」

その傷口を抉った二人はまるで反省の色が見られなかった。

「……なんでイリスに来たの？」
「む」

ベルニカの問いに振り返るマリナ。ベルニカは再びイリスの地を踏むことは無いと覚悟して出てきたつもりだったが。

「寝ぼけてたんじゃないの？二人ともここに来る直前に寝てたでしょ。寝起きはいつもこんなもんだし。セーレちゃんヨダレ凄かったもんね」

「……いつも？」

え？いつもって、どういう……？

「ん？いつもだよ？セーレちゃんよくうちに来るもん。ガーちゃん知らなかったっけ？」

？

（・∀・、）

「あの……セーレってのは、マリナのこと？」

「そうだよ。『マリナ・セーレ・ストレンジ』っていうの」

「セーレ……？」

どっかで聴いたことあるような……セーレ……？まいっか。そんなことより、

「マリナ、ティアと知り合いだったの？なんで？」

どこか困った様な表情をして考え込む。言葉を選ぶ必要があるのか、または言えないのか。……あっ、そういえばマリナ喋れないん

だっけ。どうやって伝えればいいか悩んでるのか。

「ねぇ、ティア、なんで？」

ティアに直接訊いた方が早いじゃん。

ベルニカの問いに答えようとティアが口を開こうとした。

イリスの村はいつも通りに外を出歩く人間が少ない。時々ちらほらと見られるのは、親の目を盗んで飛び出した子ども達。十三年前、レイゲンが殺された事件で村人達は矢鱈と外に出ることはしなくなった。魔物の侵入を阻むための壁が、全く意味を為していなかったからだ。魔王を倒したと言われるレイゲンが殺された。結果魔女であるアデリアに救われたのだが、村人達は戦慄し、一層子ども達の育成に力をいれた。

灰色の空の下で子ども達がまた勝手に遊び回っているようだが、それでも村の中はいつもとはまた違った静けさに包まれているようだ。こんな日はどうも昔を思い出してしまう……。

家の中で少し硬い気がするソファに老体を沈め、村長は誰かに話しかけるように呟いた。

「思えば……あの血筋の始まりは、お前だったな……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8915f/

魔女の子ども

2011年3月10日08時29分発行